

伊能忠敬研究会 名

渡辺一郎 監修

伊能忠敬

測量日

第三卷

みほん

伊能忠敬 e 史料館



「伊能忠敬測量日記」解説

伊能忠敬は満五五歳から自らの意思で測量を志し、七三歳で死没するまで、日々の出来事を日記に残した。これを調べることによって、我々は伊能測量の詳しい経過を知ることができる。

日記には、彼が測量しながら現場で書いた「忠告書」という表題の五一冊と、自身で後に清書した「測量日記」という名称の清書本二八冊の二種類が、いずれも千葉県香取市の伊能忠敬記念館に保存されていて、二〇一〇年六月二十九日、両者とも国宝に指定された。

これまでも測量日記解読書の制作は、さまざまの方々に
敬記念館館長佐久間達夫氏の「測量日記」解読
しい諸兄弟の知識を結集して、校訂された。こ
している。こない、「測量日記」清書本解読書の決定版を目指

伊能測量の公式報告は、幕府に提出された。二四冊と大図二一四枚、中図八枚、小図三枚であるが、わざわざ清書本まで作成した「測量日記」は、報告書として後世に伝えようとした記録と考えられる。

「測量日記」の記述は、天候、作業内容、宿泊地、訪問した名所旧跡や、送迎・案内など接遇にあたった諸藩の役人、町村宿場役人の名前などの事実を淡々と記し、感想、意見、批判めいたことは、ほとんど現れない。一見、無味乾燥だが、課業終了後、ひとりで、受け取った名札を整理しながら、一日の経過を綴った忠敬の

「測量日記」の精読により、想像の大きさ、海岸測線の渚からの距離など、大測の測り方など、具体的なイメージを知ることができ、梵天を知り、作業内容としては、梵天

「第二巻」と「第二巻」では、測
開始ま
から第二次測量開始までの経過が「第二巻」に、また第一次測量の終了後
交渉経
詳細に記
ある。「第三巻」から第一次測量の

記録が現れるからわかりにくいですが、測量記録のみを読む場合は、「第二巻」から始めていただきたい。

本稿の取りまとめにあたり、皆様御多忙のなかを熱心に取り

組んでいただき、有難く厚く御礼申し上げます。

伊藤栄子 古文書研究家、元伊能忠敬研究会会員
一巻、第五巻、第九巻、第十巻、第十八巻、

第二十五卷～第二十八卷

河崎倫代 伊能忠敬研究会理事 石川 白本史 (第六卷、第七卷)、

伊能楯雄 伊能忠敬研究会理事、伊能家縁戚
伊能楯雄 敬記念館館長（第八巻）

木村立彦 古文書研究家、所沢市新所沢東ま
くりセンター（第十一巻、第十四巻）

鈴木純子 伊能忠敬研究会代表
館課長（第十二巻と第十三巻の四国以外）

稲葉末明 古文書研究家（監修）

山田 洋 伊能忠敬研究会會員
文書研究
松浦 啓 佐賀（佐賀）事務局局長（第二十四卷）

入江正利 古文書研究家、元伊
敏研究会（第十五卷、第十七卷、第十九卷（第二十三卷））

渡辺一郎 伊能忠敬研究会名誉代表 (監修)

坂本 巍・横溝高一・戸村茂昭・竹村基（編集協力）

二〇一五年一〇月

伊能忠敬史料館 館長 渡辺 一郎

(伊能忠敬研究会理事 名誉代表)

「伊能忠敬測量日記」 内容

一、「測量日記」の統一した表題は、昭和二十七年（一九五二年）に、本装丁を修理した際につけられたもので、清書本二十八冊には「寛政十二年庚申、蝦夷千役志」の「完」など、それぞれに原題がついている。測量回数、表題、原題と巻別の一覧表の通りである。

二、忠敬は全部で九回の遠国測量と二回の江戸滞在部分に掲載していない。第

各巻内容一覧

表題	原題	本書表題
測量日記之内一	蝦夷千役志、啓行	測量（蝦夷地）幕府折衝編
測量日記之内二	沿海日記、啓行	測量（本州東海岸）幕府折衝編
測量日記之内三	寛政十二年庚申、	第一次測量
測量日記四	享和元年辛酉歳、	第二次測量
測量日記五	享和二壬戌歳、	第三次測量
測量日記六	享和三癸亥歳、	第四次測量
測量日記七	享和三癸亥歳、	
測量日記八	乙丑丙寅、沿海	
測量日記九	乙丑丙寅、沿海	
測量日記十	乙丑丙寅、沿海	
測量日記十一	乙丑丙寅、沿海	
測量日記十二	戊辰、沿海日記、上	
測量日記十三	戊辰、沿海日記、下	
測量日記十四	測量日記、一	
測量日記十五	測量日記、二	
測量日記十六	測量日記、三	
測量日記十七	測量日記、四	
測量日記十八	辛未・壬申、測量日記	
測量日記十九	壬申、測量日記	
測量日記二十	壬申、測量日記	
測量日記二十一	癸酉、測量日記	
測量日記二十二	癸酉、測量日記	
測量日記二十三	癸酉、測量日記	
測量日記二十四	癸酉、測量日記	
測量日記二十五	甲戌、測量日記	
測量日記二十六	甲戌、測量日記	
測量日記二十七	乙亥丙子量地日記、天	
測量日記二十八	乙亥丙子量地日記、地	
江戸日記	文化申十月二十二日ヨリ起	

「伊能忠敬測量日記」凡例

一、第三巻以降では所々に付箋や、欄外記事が見られる。また、手分け測量がおこなわれた場合、手分け隊の記事は一段下げて記載されている。本稿では、欄外、付箋、手分け隊、等の記事はわかりやすいように褐色で表現した。

原文で一行内に割注扱いで二行書きになっている記事には、
あるが、個々に判断して明白な注記は括弧内に入れたものが
扱った。多くはないが、「校訂者」が追加した
原文で三行注記や構造体表示となっていた
一致しない場合がある。

○●○村	右衛門
□□□村	仁助
△△△村	左衛門
○●○村庄屋右衛門、	村庄屋仁助、
□□□村庄屋仁助、	△△△村庄屋左衛門と表現する。

二、原文は、できるだけそのまま
ルビ(ママ)を付けて後に訂正
漢字は当用漢字と正字を原則
↓総など、普通名詞と考えるか
旧漢字で、日記の意味を伝える
倣、斯、鰐口など)。旧漢字で
↓とても、而已↓のみ、など
にはそのままとした場合もある。

三、測量日記原文の文体は漢文調で、仮名の助詞をできるだけ省き、句読点のない読みにくい文章であるが、本稿ではなるべく句読点を付し、漢字の助詞の大部分を書きなおして、わかりやすくした(ただし、原文に現れる古文書などの写しは平仮名にしない)。助詞の「爾」、「天」、「茂」、「者」、「之」、「与」、「盤」、「須」、「江」、など
「へ」と表し、また、「メ」「ニ」「西」の
「送り仮名」は付加せず、原文どおりとした
同、来、た

四、以上は原則を述べたものであり、取り扱い、地名、記事などを含めたが、したがって巻ごとに表記基準の異なる期間の出来事を書きつないだ

みほん

伊能忠敬測量日記 三卷

第一次測量

蝦夷地測量

原題

政十

庚申

〔蝦夷地測量日記〕

蝦夷地東南岸。

〔十月二十一日〕

原解読者

佐久間達夫

訂者

伊藤 栄子

校訂者

稲葉 末明

第1次測量経路図

第1次測量では千住から測り始めて、歩測で奥州街道を北上した。寒くならないうちに、急ぎに急いで津軽半島先端の三厩まで21日間で到着している。1日平均40キロ、毎日、夜明けから作業をはじめ、10時間働いている。

三厩から箱館に渡りたかったが、風が悪く、風待ちに9泊を費やして、奥州街道で頑張った日数をふいにする。船頭が気の毒がって、無理に船を出してくれた。しかし風が止んで箱館につけず、やっと吉岡に上陸して箱館まで歩く。箱館で蝦夷地取締の役所から人馬調達の添え触れを貰い、根室方面に向かって出かける。

みほん



念仏坂や、襟裳岬付近で苦勞しながらアッケシまで北海道東南岸を測量する。あとは測線はないが、天測だけでもと、根室までゆきたかったが、ニシベツへ着いたとき、鮭漁の最中のため、根室の人間はすべてニシベツにきていて、人手不足で断られる。断念して同じ道を引き返し、松前城下まで測線を伸ばしてから江戸に戻る。旅程3,200km、180日の大旅行だった。途中従者の一人が脱落したが、皆元気だった。

目次

宿泊日・旧暦	西暦	宿泊地	現・市町村
寛政十二年	千八百年		
閏四月十九日	六月十一日	大沢宿	埼玉県越谷市
閏四月二十日	六月十二日	古河城下	茨城県古河市
閏四月二十一日	六月十三日	宇都宮	栃木県宇都宮市
閏四月二十二日	六月十四日	大田原宿	同 大田原市
閏四月二十三日	六月十五日	白河城下	福島県白河市
閏四月二十四日	六月十六日	本宮	同 本宮町
閏四月二十五日	六月十七日	瀬上	同 福島市
閏四月二十六日	六月十八日	宮城県大河原町	宮城県大河原町
閏四月二十七日	六月十九日	仙台城下	同 仙台市
閏四月二十八日	六月二十日	古川宿	同 大崎市
閏四月二十九日	六月二十一日	有壁宿	同 栗原市
五月朔日	六月二十二日	水戸宿	岩手県水沢市
五月二日	六月二十三日	花巻	同 花巻市
五月三日	六月二十四日	沼宮	同 盛岡市
五月四日	六月二十五日	沼宮宿	同 岩手町
五月五日	六月二十六日	福宿	同 二戸市
五月六日	六月二十七日	五戸宿	青森県五戸町
五月七日	六月二十八日	野辺地	同 野辺地町
五月八日	六月二十九日	六月二十	青森市
五月九日	六月三十日	平館	同 外ヶ浜町
五月十日	七月一日	三厩	同
五月十一日	七月二日	同	同
五月十二日	七月三日	同	同
五月十三日	七月四日	同	同
五月十四日	七月五日	同	同
五月十五日	七月六日	同	同
五月十六日	七月七日	同	同
五月十七日	七月八日	同	同
五月十八日	七月九日	同	同
五月十九日	七月十日	吉岡	北海道福島町
五月二十日	七月十一日	福島	同
五月二十一日	七月十二日	喜古内	同 木古内町
五月二十二日	七月十三日	箱館地蔵町	同 函館市

みほん

日付の行をマウスでクリックすることで、目的の本文へジャンプします。

寛政十二庚申年閏四月 蒙台命、蝦夷地に下向しける道中の記。

閏四月十九日 朝五ツ前深川出立。上下六人、伊能勘解由、門倉隼太、平山宗平、伊能秀蔵、下人佐原吉助、新に召かかえ候。此日朝より小雨屋後に止、深川八幡宮参詣。それより両国通り浅草司天台へ立寄。先生にて御酒を給、荷物は深川より直に千住宿へ積送。此日千住宿送別の人は佐原地より被仰付候渡辺清蔵殿、伊能三郎右衛門、同七左衛門、同繁蔵、一郎、支配人鯉屋庄兵衛、堺屋源八、神田時計師弥五郎、三郎、八右衛門、綿屋富右衛門、佐原柏屋幸右衛門、柏木幸七、同時右衛門、中嶋屋善太郎という家に止宿。

閏四月二十日 朝五ツ前出立。朝より天晴て坤風、柏壁へ二里二十八町、杉戸宿（柏壁より）一里二十一町所よ手宿へ一里五町。それより二里三町栗橋宿（此間御関所。利根川舟屋平八。此日添触写しを大）。此夜。閏四月二十一日 朝曇天、少晴、八ツ半小雨、七ツ頃より小雨。夜は大雨。古河宿を朝五ツ前出立。二十五町野木宿、一里二十七町間々田宿、一里二十四町小山宿、小金井宿、一里十八町石橋宿、一里半五町雀宮宿、二里一町宇津宮城下、暮六ツ前に着。宿成田屋吉右衛門。

閏四月二十二日 朝雨止み曇天、四ツ頃晴、終日白曇、朝六ツ半後出立。二里二十三町三十間白沢宿、一里四町喜連川、二里三十町三十六間佐久山、一里二十五町四十一間大田原宿、宿大玉子屋弥市。

閏四月二十三日 朝より曇天、出立。三里一町五十四間鍋掛、八丁越堀、二里十一町四十二間半芦野宿、三里四町宿、一里三十三町白河七ツ頃に着。宿因幡屋茂兵衛という。河城下に当致置用宿は、至て小家手狭につき宿繰替し因幡屋となりし。此主は下総佐原の衛門というものの酒蔵をかり、丸屋清吉といつて酒造せし人なり、丙午年のとし、大坂にて米商に損金をなし、此白河城下へ来りけるよし。不思議に对面、酒肴を以、饗応ありしまま女房へ南簾一片遣しける。此あるじは生国は近江の国なり。

みほん

閏四月二十四日 朝小雨、昼後より大雨。夜も大雨。朝六ツ後出立。二里四町大田川宿、一里七町大和久宿、一里十町久来石宿、一里二十七町須賀川宿、二里八町笹川宿、一里九町郡山宿、二里十町高倉宿、一里七町本宮宿、七ツ後着、止宿。

閏四月二十五日 朝より大雨、昼前小雨に成、雨より雨止、曇天。朝六ツ半頃出立。一里十八町杉田宿（温石町当駅）、一里十町二里八町八丁目宿、一里七町若宮宿、二里福島城下、二里八町八丁目宿に着。夜は大雨。

閏四月二十六日 朝小雨、少晴、暮合より曇天。朝六ツ後出立、一里十二町桑折宿、一里七町藤田宿、一里八町越河宿、一里十五町四間斎川宿、一里十二町四十間白石町、一里二十三町金ヶ瀬宿、一里十二町金ヶ瀬宿、三十町余大河原宿七ツ後に着。止宿。

閏四月二十七日 朝より曇天、朝六ツ後出立。一里十一町四十間舟廻（迫）宿、一里二十五町四十間岩沼宿、一里二十九町増田宿、三十一町長岡宿、一里十三町四十間仙台城下国分町、八ツ半後に着、止宿。夜測量。

閏四月二十八日 朝より昼後迄晴天、八ツ後より曇天。朝五ツ頃出立。二里七北田宿、それより二里十九町新岡宿、三里十町三本木宿、一里半古河宿、七ツ前に着、止宿。夜測量。

閏四月二十九日 朝五ツ半後迄霧深、四ツ半頃晴天。朝五ツ頃出立。一里十三町荒谷宿、一里二十町高清水宿、二里十四町金成宿、二里六町有壁宿。七ツ頃に着、止宿。此夜測量。

五月朔日 朝曇、昼前より晴天。朝六ツ後出立。一里十三町山ノ目宿（一ノ関迄十七町有。上十五日は一ノ関、下十五日は山ノ目宿、二里十四町水沢宿、七ツ頃着、止宿。夜測量。

五月二日 晴天、八ツ前より少曇る。朝六ツ後出立。一里半金ヶ崎、二里半鬼柳宿、四里二町余花巻宿、八ツ頃に着、止宿。夜測量。（此日南部家の向井宣治と云る五百石程取れる軍学者と道を同じける）。

みほん

五月三日 朝より晴天、八ッ頃より曇る。朝六ッ半出立。三里半石鳥谷、二里半郡山宿、三里三十四町南部盛岡城下（入口に北上川有、船橋なり。仙台領石ノ巻に落る）、止宿。

五月四日 朝六ッ過より小雨、昼前後中雨、八ッ頃より曇。一里半富一声、夜に入小雨。八里三十町沼宮内宿（比間に洪民村有り、四里二十七町。洪民村、沼宮内へ四里三町、馬継）、止宿。

五月五日 朝小雨、それより曇。一里半度々小雨その後少晴、六ッ頃より又曇る。朝六ッ半頃出立。八里八町一ノ戸宿（高屋敷村あり。両宿の馬継をするなり）、一里三十一町福岡宿に七ッ頃着（福岡の末の松山あり）、止宿。

五月六日 度々小雨、亦曇天、夜初青後曇る。福岡宿より朝六ッ半頃出立。一里金田市宿、三里八町三ノ戸山辺衛と帰府の止宿を約す）、三里十五町四間浅水宿、一里十七町四十

五月七日 朝曇、四ッ頃晴天、四ッ頃曇。朝五ッ頃出立。一里二十五町五十七間伝法寺村、四里四十七ノ戸着。十九町十三間野辺地、七ッ頃に着、止宿。此夜測量。

五月八日 朝五ッ頃迄大雨、その後少晴、又曇る。朝五ッ頃出立。四里十一町小湊、四里十三町野内、青森七ッ半頃着、止宿。

五月九日 朝六ッ後より曇天、七ッ頃より晴て暮より曇る。青森朝六ッ後に立。一里十三町油川、三里十九町田、三十七間五尺、三里十六町三十間二尺平館、七ッ前に着。止宿。夜測量。此日蓬にて村上三郎右衛門殿に途中出会、青森過て村々役人案内、（油川、十三森、夏枝、飛鳥、瀬戸子、奥内、前田、清水、都、左、枚橋、後方、中沢、蓬田、瀬部地、広瀬、蟹田、石浜、深、飛弾屋、村、今、平館）

五月十日 朝曇、四ッ頃より晴天、夜に入曇る。朝五ッ頃出立。母衣月にて中食、平館より五里十八町今別村、一里三厩、八ッ半頃に着。宿工藤忠兵衛。此日平館より奥平部村、砂ヶ森村、母衣月村、大泊村その外村々役人案内。

みほん

五月十一日 朝より晴天、八ツ半後より曇、夜に入弥曇天。此日東風（此辺にてはヤマセ風という）にて渡海ならず。逗留。庄屋書出し、丑寅の風。

五月十二日 朝より曇天、夜に入少雨降。同逗留。書出し同風。

五月十三日 朝曇、五ツ半頃より少しずつ晴る。此鉄という所迄足間・方位を測量。同風滞留。夜測量。庄屋書付丑寅

五月十四日 朝より晴る。滞留。夜測量。書付同前。

五月十五日 朝より霧深。四ツ後に晴、それより雨、九ツ半後より雨、終日ヤマセ風に付逗留。書付子丑の風。

五月十六日 昼夜曇天、東風滞留。書付の風。

五月十七日 朝より晴る。も少し候よ。三ツ半頃大船に乗（津輕侯の御船なり）渡海の所、風止る。則

五月十八日 前夜より朝四ツ後迄大雨、その後小雨、八ツ頃より曇る。同東風に滞留。書付子丑の風。

三 厩 庄屋忠兵衛不出帆書付
覚

一、今日 丑寅、又は申酉、子丑の風に、帆相成不申候。
此段御断奉申上候、以上。

五月
（満ちの日々、右の付を出すよし）。

五月十九日 朝より晴天、五ツ半頃に出帆致候処、戌亥の風強なり。箱館へ着船難成趣にて、領吉岡と所へ昼後に着。暫時見合候ても同風に付吉岡に泊。

五月二十日 同所に朝四ツ頃まで風待致候えども同風致方無し。陸地一里半（中継宮歌）福嶋に到て九ツ時止宿。

みほん

伊能忠敬測量日記 第三卷

二〇一五年十月五日 初版発行

二〇一五年一〇月二〇日 第二版発行

みほん

監 渡辺 一郎

原 佐久間達夫

伊藤 栄子

稲葉 末明

協 横溝 高一・竹村 基

戸村 茂昭・坂本 巍

イノペディアをつくる会

(伊能忠敬e史料館)

会長 渡辺 一郎

イノペディアをつくる会

幹事 戸村 茂昭

〒289-1318

千葉県山武市寺崎 548

Tel & Fax 0475-82-8362

www.inopedia.tokyo/

e-mail kei@inopedia.tokyo

本書の「コピー、デジタル化等」は複製・転載の例外を除き禁じられています。